アポリネールにおける起源の欠如
―― 言語と自己への距離 ――

青　柳　悦　子

当然のごとく「フランス詩人」とみなされているギヨーム・アポリネール（1880-1918）は、フランス生まれでも、フランス語を「母語」として話す者でもない[1]。彼がフランス国籍を取得したのは1916年、亡くなる２年前のことである。それまで彼はポーランド国籍の「外国人」だった。両親もフランス人ではない。そして、イタリア生まれの彼が始めてフランスの地を踏んだのは5歳のときのことである。その彼をわれわれはあまりにも単純に「フランス詩人」（フランスの詩人・フランス語の詩人）とみなしてはいないであろうか。あるいは逆に、フランスに同化した外国人といった範疇におさめて満足してはいないだろうか。彼の存在の様態をみつめることは、彼がなぜ「詩人」であることを必要としたかを考える手立てとなろう。それはまた彼の詩のもつ力をわれわれが鮮明に感じとるための重要な契機となってくれるだろう。そして今日、「アポリネール」がいかにしてアクチュアルなひとつの問題となるかを照らし出してくれるだろう。

第１章　詩人の恋愛 ―― 関係の不成立

アポリネールといえば恋愛の詩人として有名である。恋人たちを詠ったかずかずの熱烈な、官能的な詩、そして「ミラボー橋」に代表される、恋を失った“愛されぬ男（mal aimé）”の詩。フランス詩を愛好する誰もが、アポリネールの名を聞けば、こうした恋愛の詩と彼の有名な恋愛遍歴とを思い浮かべるだろう。38歳で亡くなったアポリネールが結婚し、ようやく落ち着いた生活を始めるかに見えたのは他界する半年前のことにすぎない。

彼は一生のあいだ熱烈な恋愛を繰り広げた。無類の女好きであった彼には、よく知られている恋人たち以外にも、気晴らしに一夜を過ごすような女性関係も少なからずあったらしいが、ともかく彼が詩を捧げ、彼の伝記にも登場する重要な恋人は以下の７人である。アルデンヌ地方の田舎町スタヴロのカフェの

娘マリア Maria Dubois（アポリネール19歳）、友人の妹であるスペイン系ユダヤ人のランダ Linda Molina da Silva（アポリネール20〜21歳）、家庭教師仲間であったイギリス人女性アンニーAnnie Playden（アポリネール21歳〜25歳）、画学生であった後の詩人・画家マリー・ローランサン Marie Laurencin（アポリネール27歳〜32歳）、ニースで知り合った享楽的なシャティヨン伯爵夫人、通称ルーLou（アポリネール34歳〜36歳）、ルーとの逢いびきに向かう列車のなかで出会った北アフリカのマドレーヌ Madeleine Pages（アポリネール35歳〜36歳）、そして彼の人生の最後に伴侶となった献身的なジャックリーヌ Jacqueline Kolb（アポリネール38歳）。

伝記を読んでまず驚かされるのが、この有名な「恋愛の詩人」における、徹底した恋愛関係の欠如である。彼には熱烈に愛し、求める女性が常にいた。しかし「関係」と呼べるものがほとんどまったくと言ってよいほど成立していないのだ。相思相愛のなかで互いの関係を築いてゆくという過程は伝記のどこを探しても皆無である。恋愛関係の欠如した熱烈な恋愛の詩人という逆説にわれわれは驚きを禁じえない。

以下に彼の恋愛遍歴をたどりながら、実は彼に「恋愛関係」は存在していなかったことを確認したい。

1．マリアとランダ ―― 若き日の片思い

彼の恋愛は常に一方的である。いわば子供じみた片思いが彼の情熱のおきまりのかたちなのである。田舎のカフェの娘マリアへの思慕は彼にいくつかの詩を書かせたが、おそらくマリアとは実際の交渉は何もなかったと思われる。この恋はいわば典型的な“少年の憧れ”に類するものだったのであろう。彼は恋に恋をしていたのであり、自分の恋心に酔っていたのであって、マリアは存在していなかったも同然と言えるかもしれない。

パリに戻った20歳の彼は、今度は、たまたまサン・ラザール駅近くで知り合いたちまち意気投合したスペイン系のユダヤ人青年フェルディナンの家に招かれるようになり、その妹、16歳の褐色の美少女ランダに思いを寄せる。彼はランダの美しさと「なまり」をいとおしみ、多くの詩に謳っている。数多くの書簡詩のかたちをとった詩や LINDA の名を行頭に並べた技巧詩などそれらの詩篇は、遺稿詩集のなかで『ランダ詩篇』としてまとめられている。ところで驚くのは、職を転々とし生活も定まらない彼が、この少女に求婚したことである。状況を省みないこの一方的な情熱がいかにも彼の恋愛のありようをよく表

している。アポリネールはランダの一家がノルマンディーの海水浴地カブールに出かけているあいだに、パリから、突飛としか言いようのない結婚申し込みの手紙を送ったのである。これに対し、アポリネールを友人としてしか見ていなかったランダは、むろん拒絶の返事を送ってくる。不在の対象に思いを馳せ、一方的に情熱を募らせる彼の姿をわれわれはすでにはっきりと読みとることができる。

2．アンニー ―― 執着する喜び

アポリネールが特殊であるのは、この独りよがりな情熱が、十代の憧れだけにみられる、成熟への通過段階ではなかったという点である。代表作の一つ「愛されぬ男の歌」を生んだアンニーへの恋も徹底的に一方的であった。アンニー・プレイデンはイギリスのピューリタンの家族の娘で、若く（アポリネールの一歳年下の20歳）美しいが、平凡で堅実なタイプの女性であったという。彼女とは、ドイツ系ノルマンディの貴族ミロー子爵夫人の娘の家庭教師仲間として知り合った。裕福なこの一家はライン地方とパリとで半々に暮らしており、アポリネールもアンニーとともにこの一家に同行して1901年８月から１年ほどライン河のほとりノイ・グリュックに住むことになった。この間、彼は内気で控えめなアンニーに情熱を寄せ、精神的崇拝と猥雑な官能性とに満ちた詩篇(『ライン詩篇』)を多く残している。アンニーはラテン的な性格のアポリネールが思いを寄せれば寄せるほどむしろ尻込みする。彼自身が書簡で次のように回想している。「ぼくは、彼女を官能的に愛したのですが、われわれの心はあいへだたっていました。〔……〕。ぼくはわけもなくそのことに嫉妬しました。それも、ありありと感じられるあの不在感（アブサンス）のためです」[2)]。

彼女の明らかな拒絶に傷つきながらも、彼はあきらめることができない。１年間の家庭教師の契約期限が切れ、アンニーとも別れてパリにもどった彼は、本人の言によれば手紙すら書かなかったというが、(その間に関心を抱いた数多くの女性とは別に）彼女を恋焦がれる気持ちは消えることがなかったようだ。ドイツで別れてそれぞれ故国にもどり１年３ヶ月が過ぎた頃、アンニーは突然アポリネールの来訪を受ける。機会を得てロンドンを訪れた彼が、たちまち彼女の居所をつきとめて会いに来たのだ。二人はロンドンの街をめぐる長い散策をする。アポリネールは彼女に求婚するが、彼女が拒絶したのは言うまでもない。詩人はこの折の失恋の経験から「愛されぬ男の歌」を作ることになる。「もう逢うことも絶えてあるまい」とその最終行で詠った彼は、しかしながらその

半年後にふたたびロンドンを訪れて再度彼女に求婚している。その間二人のあいだには多少の音信があったようだが、謹厳な家族の反対もあり、結局、彼女の方はこの迷惑な恋人から逃れるようにしてアメリカに移住してしまう。

3．マリー――自ら仕立てたミューズの周囲を徘徊する男

おそらく詩人の恋のなかでももっとも有名なのはマリー・ローランサンとのものだろう。彼女はアポリネールによって才能を見出され、彼の熱愛と賞賛を受けて画家としてのデビューを果たすのだが、ここでもまたアポリネールはしつこくつきまとう「愛されぬ男」を演じている。1907年、アポリネールはすでに友人となっていたピカソの個展で、画学生のマリーと出会う。マリーは利発で勝ち気な才気のある女性で、アポリネールはたちまち惹きつけられて彼女を自分のミューズ（詩神）として歌い上げる。彼女もまた詩人に魅了された。アポリネールはどこにでも彼女を連れて行き、無名の女子画学生を、サロンにも出品する一人前の画家に育て上げる。知り合って二年後にはマリーを熱愛する彼は住まいも彼女のそばに移すのだが、すでにマリーは彼を疎んじていたらしい。後年の自伝的小説『虐殺された詩人』のなかには「彼女が彼を熱烈に愛したのは一週間だけだった」という記述すら読める[3]。彼はつづけて、彼女の独白として次のような文章も記している。「私はもう彼を必要としていない。私は私の熱愛者だけで充分。ゆっくりと彼と別れることにしよう。しかしそんなまどろっこしさは私をあきあきさせるだろう。彼にうるさくつきまとわれたり、彼からとやかく文句を言われないためには、私のほうがどこかに行くか、さもなければ彼が姿を消してくれなければならない」[4]。

この小説中に記されているように彼女はほかの男性とつきあい始める。「彼女は相変わらずクロニアマンタル〔＝アポリネール〕に会いに出かけてはいたものの、彼に対してしだいに冷たくなっていった。彼女がますます彼に会いにいかなくなるにつれて、彼はますます絶望していったが、逆にますます彼女への思いをつのらせた」[5]。アポリネールの恋は絶望すればするほど高まってゆく。不在の対象への欲望と恋心、とりわけ自分を捨て去った女性への未練がましい恋着こそが、彼の精神をもっとも高揚させ充実させるように思われる。恋をしながら独りでいる状態こそ、実は彼の魂がもっとも満足する時間を与えてくれるのだ。彼の文学もまたこの好色な孤独の状態から生まれる（「このようにして、クロニアマンタルは、トリストゥーズ・バルリネット〔＝マリー・ローランサン〕を追いかけながら文学の修行をつづけた」[6]〔強調拙論者〕）。彼のすべての

恋愛詩が、互いの交歓ではなく一方的な夢想や熱情を詠ったものとさえ言えることに注意したい。失恋後の詩はむろんのこと、交際中もである。

疎んじられていることを充分に承知していながらも、マリーとの恋愛はこうしてぐずぐずと引き延ばされる。マリーは依然として彼に冷たい。アポリネールが投獄された1911年の「ジョコンダ事件」の際にも、マリーはまったく彼を助けようとはしない。それどころかこの事件を契機に彼女の方は、彼に完全に愛想をつかしたように見える。二人の関係の破綻を画する大きな節目は、1912年の再転居である。アポリネールはついにマリーの近くを離れる。この頃書かれたのがあのもっともよく知られた失恋後の苦悩を詠う詩篇「ミラボー橋」である。しかし最終的に終止符が打たれるには、より外的な強制力が必要であった。1914年6月マリーはドイツ人画家と結婚しパリを発つ。こうして詩人と女流画家のエピソードはようやく幕を閉じる。だが周知のように、彼の詩作のなかでは、マリーはその後も常に生き続けることになる。

4．ルー――夢想による官能の逸楽

その年1914年の夏、第1次大戦が始まる。8月1日にはフランスに総動員令が出された。ポーランド国籍であるためにアポリネールには兵役義務がないが、彼はパリでみずから志願する。だがそれが却下されたために彼はニースに赴いて再志願をねらう。9月末そのニースでのある夜会で、彼は貴族出身という美しく驕慢でコケティッシュなルー（ルイーズ・ド・コリニー＝シャティヨン）と出会う。彼女は33歳、彼の一歳年下で、2年前に離婚して当時は独身中の、魅力溢れる女性であった。たちまち夢中になったアポリネールは翌日には熱烈な恋文を送っている。しかし二人の交際には進展がなかった。ところが12月になって、彼の志願が受け入れられてニームの中隊に入隊すると、彼の方はルーとの関係をほぼ諦めていたにもかかわらず、ルーの方が彼を追ってニームにやってくる。こうして12月の初旬、アポリネールとルーは兵営の柵を越えて逢いびきを重ね、熱烈な愛欲の9日間を過ごす。それ以後1年間アポリネールはルーに宛ててあの多くの手紙と詩とを送り続ける。二人の濃密な時間を回顧しながら綴られるそれらの詩は高く評価されている。

興味深いのは二人が本当に親密な関係にあったのは、この9日間だけだということである。その後も二人は2度逢瀬の機会を持ってはいる。新年の休暇にはアポリネールの方がニースに赴いて、二人は一緒に3日間を過ごしている（このときの帰路の汽車のなかで彼は次の恋人になるマドレーヌに出会う）。しかし

双方にとって遊びの側面をもつこの恋愛はすぐに冷めてゆく。とりわけ気まぐれな性格のルーの反応がすぐに冷たくなる。3月には二人の最後の逢いびきがあるが、ルーは交渉を拒否している。4月、アポリネールはフランス北方シャンパーニュ地方の連隊に配属になりニームを発つ。二度と二人が逢うことはないが、アポリネールは彼の傑作に数えられるいくつものエロティシズムに溢れた詩篇を、その後もルーに書き送るのである。不在の女性にたいする官能の眩惑が、兵営という孤独な環境のなかで、詩として熟成されるのである。

5．マドレーヌ ―― 自己認識の苦渋

ルーとの逢いびきに向かう列車のなかで出会ったマドレーヌとの恋愛の経緯はアポリネールの求める恋のあり方を、裏側からよく照らし出している。マドレーヌはアルジェリアのオランに住む22歳の若く美しい女性。アポリネールと彼女は1915年の1月2日に、先にも述べたように汽車のなかで出会い、楽しい会話を交わした。アポリネールは北方の最前線の部隊に移った4月、ルーへの手紙を書く合間に、この女性にもらったアドレスをたまたま発見し、約束していた詩集を送る口実で手紙を出す。こうして熱烈な文通が始まる。アポリネールはルーとマドレーヌの二人に、交互に、あるいは同時に、詩を書き送っている。8月、車中で数時間を一緒に過ごしただけのマドレーヌに求婚の申し込みがなされる。一方的な夢想によって育まれる彼の恋愛がいかなる強度をもっているかに驚嘆させられる。

意外なことにマドレーヌの母親はこの婚約に賛同し、10日ほど後には彼のもとに婚約承諾の手紙が届いている。その後、アポリネールは、まだ触れたこともないはずのマドレーヌとのエロティックなシーンを夢想した詩や、恋の機微を詠った詩などを書き送っている。マドレーヌに贈った作品のなかでももっとも魅力的な、衝撃力に富むものは、この時期に集中している（『秘めごと歌』ほか）。

最初の出会いからほぼ1年後の12月末、ようやく彼は「婚約者」であるマドレーヌとオランで再会する。長いこと夢見ていた彼女との肉体関係も得るが、オランでマドレーヌの家族とともに過ごした2週間は、最愛の女性と共に日々を送る喜びに満ちたものであるどころか、むしろ彼にとっては苦痛に近かったようだ。堅実な家庭に、婚約者として家族同然に迎え入れられることは、官能の逸楽を求める奔放な夢想家である彼に幻滅を強いることだったのだろう。そこには彼の想像力と欲望を刺激するものが何もなかったにちがいない。その安

定した退屈は、彼にとっては生を剝奪される感覚にも近いものだったのかもしれない。

正月の休暇を終えて前線に戻った彼は情熱の冷下を感じながらもマドレーヌに手紙を送りつづける。3月、彼の部隊は最前線に移動する。その3日後、1916年3月17日午後4時、アポリネールは塹壕の中で自分の書いた記事の載っている新着の文芸誌を読んでいるときに、頭部に流れ弾を受ける。流弾の破片が鉄兜を貫いて右のこめかみにくいこんだ。

彼は野戦病院で応急手術を受けて砲弾破片を摘出したのち、傷口化膿のため3月末にパリの陸軍病院に移って再手術を受け、さらに病院を移って5月に3度目の手術を受けている。重大な脳障害はなかったものの、気絶や手の麻痺などの症状があったためである。最後の手術の後も倦怠や情緒の不安定、記憶の欠落などの症状が残ったが、入院療養生活を続けながらゆっくりと快方にむかってゆく。

アポリネールは婚約者であるマドレーヌにはすっかり興味を失っている。彼女はけなげにも病院まで駆けつけて看病を申しでるが、彼は冷淡に拒絶している。さらに8月には絶縁の手紙を送っている。こうした彼の態度を記憶障害のためと判断する批評家もいる[7]。たしかに11月に送った最後の手紙で、彼は身体の不調とともに、自分が以前とはすっかり変わった人間になってしまったという告白をしている[8]。しかしマドレーヌとの不和の理由は、彼本来の生への欲望のあり方に求められると、われわれは考える。彼にとっては生身のマドレーヌとの実際の接触は、退屈で、忍耐を要するものだった。病気は彼にこの「がまん」を耐える気力を奪ったにすぎないのではないか。

マドレーヌは不在の想像上の対象として長く彼のエロスを喚起するミューズであっただけに、詩人はこの若い娘の日常性に満ちた凡庸な献身を受けいれることができなかったのではないだろうか。そして誰よりもおそらく彼自身が、自分のこうした反応に驚き、苦しんでいたのだと思われる。さきの絶縁の手紙にも、「どうか会いに来ることだけはやめてほしい、来ればぼくの気持ちが動転するばかりだ。悲しい手紙もお願いだ書かないで、ぼくを怖がらせるばかりだ」[9]と記している。死の年には彼は、マドレーヌに対して「良心の呵責と悔恨ばかり」を抱いていたと伝記作者アデマは言いきっている[10]。何が彼を動揺させ恐怖に陥らせるのか。なぜマドレーヌとの恋は彼にもっぱら悔恨の念を抱かせるのか。それは彼自身が自分の欲望のあり方をそれまで直視したことがなかったからであろう。

彼はそれまでの恋愛においてたえず、自分が強く求める相手から拒絶され、その苦悩のなかで傷ついてきた。そして傷つきやすい自分の感性をナルシスティックに愛してきた。ところが今自分は、マドレーヌを前にして、自分では愛していると信じ込んでいる相手から誠実で健全な愛情を注がれているのに、その愛に応えることができない。二人で落ち着いた静かな生活をしたいと、前線から何度も手紙を書き送ったのは彼自身である。しかし彼は夢想のなかの光景としてしかそれを望んではいなかったのだ。自分の夢想や欲望が、自分の生の真摯な欲求に基づくものだと信じていたにちがいない彼にとって、しかもそこにこそ詩人たる自分の根拠を見出していたにちがいない彼にとって、新しい状況でのこの意外な自分の発見は自己否定にもつながる深刻な意味をもっていたのではないだろうか。もしかしたらこのマドレーヌとの苦い経験こそ、彼がもっとも痛切にアイデンティティの問題を自問する機会を与えたのかもしれない。

6．ジャックリーヌ ―― 静かな眠りへ

この入院中も何人かの女性に彼は夢中になっている。その一人がリュビーと呼ばれたジャックリーヌ・コルブである。1917年３月にはようやく退院して、シュール・レアリスム演劇『ティレジアの乳房』の上演や小説の執筆に力を入れる。エロスそのものによる詩作よりも、(むろん官能性に触発されながらであるが) やや知性的な想像力による創作活動が活発化していることも注目される。８月にはジャックリーヌほか何人かと彼女の故郷のブルターニュに旅行している。そして翌18年の１月、アポリネールは肺充血により入院、手術を受ける。一時は危篤状態になる重病であったが、ジャックリーヌの手厚い看護のおかげもあって３月の退院にこぎつける。見舞客を制限する病院の規律を逃れるため、ジャックリーヌが看護婦の白衣を着てまでして献身的に彼の傍らに付き添ったという逸話は有名である。

ジャックリーヌとの関係では、激しい肉欲と奔放な想像力はもともと影をひそめている。年齢のせいも若干あるかもしれないが、病気が大きく影響していることは否めない。ここにはもはやわれわれの知っているアポリネールは存在しない。人並みはずれた健康体で常にエネルギッシュであった彼、あらゆることに前向きで、朗らかな好色漢であった彼。ともかくアポリネールはいわば、アポリネールらしさを失った晩年にして初めて、幻想を糧としない心安らぐ人間関係を落ち着いた女性と結ぶことができたのである。

5月2日、アポリネールとジャックリーヌはピカソらの立ち会いのもとに結婚する。新婚旅行に出かけたものの、パリに戻るとすぐに病気が再発。それでもさまざまな執筆活動を旺盛にこなす夏をおくったが、9月に再び健康が悪化。そして11月、パリに猖獗をきわめたスペイン風邪にかかり、数日間病床についたのち、9日午後5時、詩人は永遠の眠りにつく。38歳であった。

以上恋愛の詩人として知られるアポリネールの実際の恋愛において、「恋愛関係」と呼べるようなものがみごとなまでに欠如している様を確認してみた。彼には他者との相互的な関係のなかで自己の位置づけをはかるという回路が欠落しているように思われる。

処女作とも言える若き日の詩篇の第1行に、「ある夏の夜、愛は不在を妻とした」[11]という彼の悲痛な叫びをわれわれは読むことができる。詩人が人間関係をともに作り上げてゆく相手をもつことがなかったということ、いいかえれば不在を対象として彼の恋愛関係は成立していたということを、彼自身、ほとんど無意識のうちに痛感していたのだろう。また彼は後年、「あなたは実在するのか　ぼくのマドレーヌよ／それともあなたはぼくが求めずして創り出した本質にすぎないのか／孤独を満たすために」[12]とも詠っている。不在の対象をみずから創り出し、それを求め、その一方的な想像上の関係を詩作の動機としてゆくアポリネールの姿がここにはある。

注意すべきことは、彼が凝視していたのはやはり不在の対象の方であったように思われることだ。彼の視線は必死にその不在の対象に向けられているのであって、彼自身に振り向けられているのではないように感じられる。彼は自意識のひとではない。彼は不在の対象を迂回することによる自己探求をねらっているのではない。アポリネールの一方的な恋愛がナルシスティックな側面を有しながらも、他者を利用した自己執着の欺瞞を感じさせない大きな理由は、そこにあるのではないだろうか。

一般には、自分の存在様態に目を凝らし、自己の本質を探求することこそ、われわれ近代人の、とりわけ西欧において詩人たるものの最大の課題ではないだろうか。こう考えるとき、自己へのまなざしを欠いたアポリネールの存在の意識のあり方はきわめて興味深く思われてくる。

しかも彼の出自を瞥見すれば、彼こそは自我像の確立を必要とし、アイデンティティの問題に直面していたはずだと当然考えられそうなのにである。

第2章　家族関係の不在

自己の規定というものは他者との関係によって外部からしかおこない得ない側面が大きいことはミハイル・バフチンの議論を始め[13]、近年の他者論において明確に確認されたことである。ところが彼には恋愛の対象が実は不在であり、そして実はあらゆる家族が不在であったのだ。彼には家族の面でも人間関係が存在しなかった。彼のアイデンティティなるものがいかなる様態にあったのかを考察するために、彼の出自と生い立ちを振り返ってみることにしよう[14]。

1．放浪の享楽家、父フランチェスコ

アポリネールの父親はイタリアの最高の名家の一つフルージ家の出であるフランチェスコ・フルージ・ダスペルモント（Francesco Flugi d'Aspermont）である。詩人の父親がつきとめられ公にされたのは1952年、マルセル・アデマによる精緻なアポリネールの伝記の刊行によってである。すなわち詩人の死後34年も経ってからのことであった。この時まで詩人の父親は不明とされてきたのであり、多くの場合、さる聖職者と推測されていた。また詩人自身、自分の父親の名を知らず、どんな人物であるかを知らなかったとされている。

詩人自身は知らなかったとしても、この父親フランチェスコの像をいくらか明らかにしておくことはわれわれにとって興味深いことである。フランチェスコの父親ニッコロ（詩人の父方の祖父にあたる）は勇将として名高いシチリア王国の軍人（1856年死去）であった。ニッコロは3女と4男をもうけた。アデマの伝記によれば、娘の一人はベネディクト修道会の上長者となっており、長男は医学博士であるとともにやはりベネディクト会士であり、法王ピオ9世の信任を得て、修道会の高位にまでのぼりつめている。次男も四男も軍人・財界人として、また官吏として成功し、それぞれ名家の令嬢と婚姻関係を結んでいる。

さて詩人の父親である1835年生まれの三男フランチェスコであるが、彼だけはこの堅実な家系にあってひとり放蕩息子を演じている。フランチェスコは血気盛んな軍人として、シチリアの王フェルディナンドII世の幕僚部大尉を勤めたが、シチリア＝ブルボン王家の失墜とともに退役している。その後は新しいイタリア国の軍務にはつかず、また一向に家庭をもとうともせず、何年にもわたってヨーロッパ各地を遍歴し、家族にもその消息がつかめないことがままであった。数年後ローマに戻った彼は教会関係の仕事についていたようであるが、

頻繁に社交界に出入りしていた。40歳を過ぎた奔放で魅力的なフランチェスコはそこでどうやらアンジェリックと出会ったらしい。たちまち二人は意気投合して堅苦しい名家の環境を飛び出し、モナコなどでカジノに明け暮れる日々を送る。フルージ・ダスペルモント家の息子であるフランチェスコは旅先でも遊蕩のための資金を容易に借用することができたらしい。そして1880年二人はローマに戻るが、アンジェリックのお腹には二人の子供である、のちのギヨーム・アポリネールがいた。

子供の誕生後も、乳母にその子を預けて、二人は温泉保養地やカジノをめぐって歩く享楽の生活を再開する。フランチェスコは二人のあいだにできた息子の認知もせず、結婚の気配もないが、アンジェリックとの関係は続いていたのだ。しかし彼は、アンジェリックを置いてふいと一人で旅に出てしまうこともあったようだ。その間にアンジェリックは、おそらくは別の男性とのあいだの子である二人目の私生児を生む(その父親は不明のままである)。これがギヨームの２歳下の弟アルベール（Albert）である。フランチェスコはすでに自分の家族とは音信不通の状態にあった。しかし名家を楯に遊興の資金をあちこちで借り出していた。結婚もせずに子供を産ませて家名を傷つけ、なおも各地を遊び歩いて家族に負債を払わせ続けるフランチェスコに、ついに家族は業を煮やす。不名誉な恋愛関係を清算するよう長兄は彼に国外退去を言い渡し、アメリカに渡るよう手筈を整える。まとまった額の金も与えられて1884年フランチェスコはアメリカへ向けて出発する。しかし彼は、家族の目を欺き、大西洋を渡るどころかイタリアから出もせずにすぐに下船して、ナポリで彼を待っていたアンジェリックと落ち合ったのである。

しかし結局、翌年の1885年フランチェスコはアンジェリックのもとから失踪し、以後はそのまま消息不明となってしまう。

２．亡命家庭の奔放な娘、母アンジェリック

実人生を生きる人間としての、また詩人としてのアポリネールの「魂」の形成を知る上で、彼の母親を無視しえないことは、数々の研究でも語られているとおりである。そこでアポリネールの気質や生き方に決定的な影響力をもったと思われる彼の母親についてみてみることにしよう。

母親の家系であるコストロヴィツキー家は、リトアニア地方を起源とする、ポーランドの小さいが古い貴族である。1865年、ロシアの支配下にあったポーランドは独立運動に失敗し、一家はツァーによって財産を没収される。兄弟が

シベリアに流刑されるなか、詩人の祖父に当たるミシェル・コストロヴィツキーは妻がイタリア人だったお蔭でなんとか義父母のいるイタリアへの亡命に成功する。こうして夫妻は幼いひとり娘アンジェリックを連れてローマに移った。これがむろん詩人の母である。彼女はやはりロシア領であったヘルシンキで1858年に生まれているのでほぼ7歳であったことになる。こうして彼女のイタリア生活が始まる。カトリック教徒であった父親のミシェルは亡命後、比較的すぐに、法王庁に侍従として仕えることになる。その縁でピオ9世の紹介・推薦を得て、翌年11月アンジェリックは規律も厳しい名門のサクレ・クール・フランス修道院の寄宿舎に入ることができた。アンジェリックは、言語も文化も人間関係もまったくそれまでとは異なる環境のなかに放り込まれたことになる。しかし8年後の1874年、父ミシェルは16歳のアンジェリックを修道院から引き取らざるをえなくなる。さきの伝記研究者アデマによると、彼女はその早熟さ、扱いにくい性質、激しいものへの好み、宗教的戒律への不服従、すでに行動に垣間見られた官能性などのためにいわば問題児であったらしく、いくつもの事件を引き起こして退学を勧告されることになったらしい。一種の環境不適応であるが、それが内閉的な適応不順ではなく活力の横溢によるものであるのは、周囲にとってはやっかいなことではあったろうが、われわれとしてはむしろ彼女のたくましさに脱帽したくなる思いがする。かくしてヴァチカンに住む父のもとへ引き取られたものの、アンジェリックにはむしろ贅と享楽とが必要であった。そこで両親は彼女をできるだけ早く結婚させるのがよいと考えて社交サロンに出入りさせるようになる。こうしてアンジェリックはフランチェスコと知り合うことになったのである。

3．不在の母／母の不在

ギヨームを生み、フランチェスコが失踪するまでの簡単な経緯はさきに触れたとおりである。

フランチェスコの失踪後アンジェリックは二人の子供を連れてモナコに移る。当時モナコではイタリア語が主に話されていたというから、母子にとって移り住むのに不自由な場所ではなかったと思われる。このモナコ移住はおそらくフランチェスコの兄ドン・ロマリノの手引きによるものとアデマは推測している。ドン・ロマリノはモナコの教会管理者という高位の聖職についていたからである。幼い兄弟はおそらく彼のつてで、裕福で高貴な家庭の子弟のみが学ぶサン・シャルル校に入学する。母子はこの時からその後15年近く、詩人が19

歳になるまで、フランチェスコの実家から資金的な援助を受けている。

母アンジェリックは子供二人を寄宿舎に預け、遊興の日々を送っていたらしい。のちにアポリネールが17歳の頃、アンジェリックには新しい愛人ができる。11歳年下のストラスブルグ生まれのユダヤ人ジュール・ウエールである。二人はまもなく同棲し始め、この関係は二人が相次いで亡くなる1919年まで続いた。アポリネールや弟アルベールにとってジュールは家族と見なしうる存在であり、とりわけアポリネールとジュールはうまがあったらしい。そのことは自伝的な『虐殺された詩人』からも明瞭にうかがわれる。多くを期待することのない、距離を置いた関係が、アポリネールにとっては幼い時から自然な家族関係であったのだろう。彼にとっての唯一の「肉親」とも言える母親に対してもである。

ともかくアンジェリックは自分を犠牲にして子供たちのために尽くすタイプではまったくなかった。アポリネールには、「母親」の類型として想像されるような、自分を優しく見守りたえず温かく保護してくれる母親はいない。そのことは悲惨にして滑稽なあのスタヴロ事件でもはっきり知ることができる。

1899年、コストロヴィツキー一家（アンジェリック、ジュール、アポリネール、アルベール）はリヨン、パリ、ベルギーなど各地を遍歴する。アポリネールは大学入学資格（バカロレア）取得をあきらめ学業を放棄したものの、これといって定職もない19歳の青年である。一家はベルギーではアルデンヌ地方に滞在した。彼がカフェの娘に思いを寄せたのは、弟と二人で泊まっていたこの地方の小さな町スタヴロのことであった。スタヴロ事件とはこの町での宿泊代の踏み倒し騒動のことである。母親は近くの温泉地スパの高級ホテルに滞在してカジノに明け暮れていたが、賭博に敗れて愛人とともにパリに引き揚げてしまう。アポリネールと弟はスタヴロの宿屋に残されたままであるが、３ヶ月も宿賃がたまっている。手紙で送金を求めても母親はパリまでのわずかな汽車賃しか送ってこない。しかも早くパリに戻ってこいと言う。こうして母親に踏み倒しを教唆された兄弟は、10月５日未明、宿代600フランを未払いのまま宿を夜逃げしてパリに戻る。

この無銭宿泊の訴訟が起こされ、11月彼は裁判所に召喚される。その後、宿賃の弁済を約束して示談が成立し、翌年１月には、公訴棄却の決定がおりて、この事件は落着する。われわれがこの事件に見るのは、家族からも社会からも孤絶ぎりぎりの状況で生きているアポリネールの姿である。

アポリネールはおおむね母親とともに生活していたが、27歳頃から別個に暮

らすようになる。するととたんに母親は彼の周囲から姿を消してしまう。われわれが母親の影を見ることができるのは、わずかにマリー・ローランサンとの結婚に反対してきた時と、彼の葬儀の折にすぎない。しかしこうした長年にわたる没交渉の関係は、幼少時から「不在の母」をもった彼には、ごく自然なことであったにちがいない。

4．家族関係の欠如

アポリネールの家系・生い立ちについて強調したいのは、彼には家族というものがなかったということである。すでに見たように、父親は失踪して不明、母親も子供の養育を放棄する傾向がみえる。しかも彼にはそのほかの親族というものもいない。両親の経歴を少し長くみたのはそのためであるが、父親の家系とは養育費援助という金銭的関係を除いては絶縁状態であり、いかなる親族的な交流関係も存在しない。母方に関しても、アポリネールの祖父は彼の出生以前に亡くなっており、また早くにローマを離れたために祖母の家系とも交流は絶えていたと思われる。そして母アンジェリックはひとり娘であったから、アポリネールには叔父や叔母がいない。フランスで育った彼はおそらく自分の親族というものに会ったことすらなかったと思われる。彼は血縁による、温かくて安定した、しかし一方で束縛にも満ちた親族関係のなかに置かれたことが一度もないのだ。

もう一つ指摘しておきたい点がある。アポリネールには、居所の定まらない放浪家めいたところがあるのだが、それは家系のなかで突然変異じみたものとして現れた性質ではないということである。彼はいわば二世の立場にあるのだ。彼の両親はともに放浪癖とも呼ぶべき非定住の傾向をもっていた。父親は才能と境遇に恵まれながらも定職につかず、ついには失踪してしまったことは象徴的である。母親もまた享楽を求めて各地をさまよう病癖にも近い傾向をもっていたことは、すでに見たとおりである。

さらに母親に関しては、彼女自身の異邦性を強調しておきたい。ポーランドの古い家系の出であり、ロシアの支配の下でヘルシンキで生まれ、そして7歳のときにイタリアへ連れてこられたアンジェリックは、幼年期にさまざまな異言語体験のなかに置かれたことになる。彼女もまた、アポリネールと同様に、自分の故郷、自分の母語（第一言語）というものが特定しがたい状況に育ったのだ。アンジェリックは寄宿舎に入ることによって7歳からイタリア語の環境に生きることになる。そしてアポリネールもまた8歳のときからそれまで使っ

たこともないフランス語の環境で生活し始め、のちにはわれわれの知るようにフランス詩人として生きることになったのである。ともかくアポリネールが、ランボーやボードレールと違って、放浪者・亡命者の子として生まれたことを忘れずにおきたい。彼は土地に結びついた旧家庭の子として生まれ、みずから反逆的なボヘミヤンとなったのではない。彼は生まれながらに浮遊状態に置かれていたのであり、アイデンティティ喪失の第二世代なのである[15]。

第3章　言語への距離

1．名前

われわれはごく自然に彼のことをアポリネールと呼んでいる。この論文でも幼少時代の彼をもほとんどアポリネールという名で指してきた。だがそれは、文学史上の人物として彼を知っているわれわれ後世の人間の習慣を利用してのことにすぎない。彼の名はきわめて不安定である。それは彼の存在の不安定さにむろん直結している。彼はいったい本当は何という名であるのか。何を本当の彼の名だと考えるべきなのか。彼はいったい誰なのだろうか。以下に彼の名についてみてみよう。

彼の伝記や研究書では多くの場合、彼の「正式の」名は、「ギヨーム・アルベール・ウラディーミル・アレクサンドル・アポリネール・コストロヴィツキー」とされている。フランス文学辞典などで多く採用されているのは、フランスでの国籍取得時の官報の記載「ウィルヘルム・アポリネール・ド・コストロヴィツキー、通称ギヨーム・アポリネール」である。いずれにしても彼の正式の姓はコストロヴィツキーであり、われわれの知っている彼の名は、後年の通称にすぎない。彼が自分の天職として好んだ軍隊生活[16]においてもむろん（フランスでの）正式な戸籍名が用いられたから、彼はもっぱらコストロヴィツキーと呼ばれていた。かといってすぐに想像されるように、彼が筆名と実人生における名を使い分けていたとも言えない。彼には、詩人・文学者としての自分の存在と、日常生活での自分の存在を別個に立てたいという欲求はなかったように思われる。彼においては実人生と文学は、ほかの作家よりもはるかに連続したものとしてある。多くの詩が書簡のなかに書かれ、まず恋人に送られたことはすでに触れたとおりである。18歳ぐらいから彼は詩作時ばかりでなく、友人や恋人との関係においても、日常的にはギヨーム・アポリネールを名乗っている。

われわれの感覚からすれば奇妙にも、そもそも彼は名に対して自己の存在の

基盤を求めていないように思われる。彼が、自分に、正当なただ一つの固定した名を与えることに固執した形跡は皆無である。また逆に彼には、たとえばスタンダールのように、いくつもの名を横断することにナルシスティックな喜びを感じる、といったようなこともなかった[17]。スタンダールとは違って、アポリネールには偽名癖はないといえる。彼はみずからに渾名をつけて楽しむというようなことはしなかった。自分の名前に関するアポリネールとスタンダールの態度の対照的な相違は、それが「自己愛」というものに関する二人の文学者の対照的な態度を含んでいるだけにきわめて興味深い。

ともかくアポリネールは自分の名前に拘泥する様子がない。フランスでの戸籍名とは違う通称にしても、フランス社会になじむ名を、自分の名の一部からとって選んだにすぎない。彼は「アポリネール」も「コストロヴィツキー」も、どちらの名にもとくに執着するわけではなく、またどちらかの名をとくに嫌悪するということもなく、両方を状況に応じて使用していたように思われる。われわれには彼のこの無頓着さがむしろ驚きである。彼ほど名前の変動を強いられた人間ならば、自分の「根拠」として名前を強烈に意識してもよいはずなのに。ここでもまた彼の「自意識」の欠如がわれわれの興味を惹く。

ともかく彼の名の変遷をたどってみよう。

出生（1880年8月26日）後のローマ市庁舎への出生届（8月31日）の氏名は、ギヨーム＝アルベール・ドゥルチニ（Guillaume-Albert Dulcigni）となっている。この姓はむろん父のものでも母のものでもない。記録には、母親は名前を秘すことを望み、父親は不詳、とされている。届け出は産婆がおこなった。母アンジェリックは同行していたが、彼はいわば孤児とされたのである。

1ヶ月後9月29日に母親に連れられて洗礼を授けられる。洗礼名は、ギヨーム・アポリネール・アルベール・コストロヴィツキー。教会で初めて母親は自分の子であることを公にし、自分の姓を与えたのである。

11月2日、思い直した母アンジェリックは、役所に認知の申し立てをする。登記が翌日になされる。このときの名が、さきの「正式」名である。姓はKostrowitzky、ファースト・ネームはGuillaume, Albert, Wladimir, Alexandre, Apollinaireとなる。フランスの貴族の風を装おうとしたのか、母親は「ド」を名のあいだに入れることを好んだ。彼の最も普通の名はギヨーム・ド・コストロヴィツキーとなる。ただ、家族のなかではドイツ風にウィルヘルムと呼ばれていた。

8歳からフランスでの学校生活が始まる。サン・シャルル校にはウィルヘルム・ド・コストロヴィツキーという名で在学した。このスラヴ系の読みづらい姓が珍しがられて、級友のあいだから父親不詳の彼についてロシア皇帝の御落胤説が出、それを彼自身面白がっていたという話が残っている。ともかく以後、この「ウィルヘルム・ド・コストロヴィツキー」を彼は本名というか公式の名として用いることになる。学校や勤務先そして軍隊での彼の名はこの名である。

家庭内や友人とのあいだでは、彼はしだいに、フランス風にギヨームと呼ばれるのが普通になる。

19歳のとき、スタヴロからパリに戻った際におこなった外国人登録の氏名はギヨーム・コストロヴィツキーである。

文学上では17歳の頃から、最初のギヨーム・マカーブルの筆名に次いで、ギヨーム・アポリネールの名前が用いられ始める。ただし21歳のときに彼の詩3篇が初めて印刷された折の名は、ウィルヘルム・コストロヴィツキーとなっている。もっともこの名が選ばれたのは彼の意志によるのではなく、編集者が「アポリネール」よりもその方が重々しくてよいと考えたからにすぎない。しかし次第に彼はギヨーム・アポリネールを名乗る機会がふえ、この名が定着してゆく。

以後は私信も含め、日常生活や文学生活において、基本的にギヨーム・アポリネールが用いられる。ただしまれには、本来の詩人としての活動を外れる際に（ローランサンとの共同作品の発表の際や、『メルキュール・ド・フランス』の「生活奇聞」欄の担当初期、死の直前のゴシップ欄の担当時など）、カモフラージュのための筆名を用いることがあった。

1914年の入隊の際以降、軍務においてはすでに述べたように、むろん正式名ウィルヘルム・ド・コストロヴィツキーが用いられている。

1916年3月9日のフランス国籍授与の官報での公示はすでに述べたようにWilhelm Apollinaire de Kostrowitzky、通称Guillaume Apollinaireである。

彼は状況のなすがままに、コストロヴィツキーともアポリネールとも名乗り、ウィルヘルムともギヨームとも呼ばれて生きた。彼にとって名は、便宜的なものであったという印象を受ける。

彼がこの世において初めて与えられた姓が、ドゥルチニという、彼自身とは無縁な、架空の、そして仮の、名であったことは、どうしても象徴的に思えてならない。彼には自分の「真の名」という問いがなかったのではないだろうか。

それは彼の言語一般に対する距離感ともつながっているのではないか、というのがわれわれの立論である。

2．外国語としてのフランス語

すでに生い立ちのところで見たように、彼はイタリアで生まれ、ポーランド語を母語とする（イタリア育ちの）母によって育てられた。その彼が初めてフランスの地を踏むのは5歳のときであった。そして本格的にフランス語での生活を始めたのは、おそらく、8歳でモナコの学院に入学し、母親のもとを離れて寄宿舎に入ったときからであろう。彼はたちまちフランス語に習熟し、成績も非常に優秀であったことが記録に残されている[18]。12歳では全科目で首位を争うほどの優等生であったし、またフランス語によって詩も書き始めている。そのころには、彼にとってすでにフランス語は、完全に第一言語になっていただろう。フランス語は彼にとって、他の言語のどれよりも最も習熟している言語というにとどまらず、意識せずとも口をついて出てくる「自然な」言語となっていたにちがいない。

というわけで成長後、彼がフランスの（フランス語の）詩人・作家として生きたことに、彼も周囲の人々もさしたる疑問を抱かなかったであろうと思われる。一般にわれわれもまた、彼が、生まれつきフランス語を話していたのではないという事実を知らないか、忘れているか、あるいは重要ではないとみなしている。だが彼がフランス語の「ネイティヴ」な話し手ではない、ということは実はとても重大なことではないのだろうか。

彼は後年、次のように回想している。

> 5歳まで、私はフランス語をひと言も知らなかった。私は、イタリア語とポーランド語を話していた。フランス語を読むことを習いはじめたころ、フランス語のすべては驚きの的だった。私はある物語を先生が読んでくれたのを思い出すが、そこで主人公は長い説教をしたあと、«Il se tut»（イル・ス・チュ）（彼は黙った）とつけ加えた。綴字を知らないので私はそれを«Il se tut»（イル・ス・チュ）（彼は自殺する）と理解した。それで私は長い間、フランスでは、説教師はしゃべったあとで自殺するのだと思い込んでいた[19]。〔強調、拙筆者〕

興味深いのは、彼が成年後もずっと、この幼いときの異言語体験をはっきりと覚えていたということである。彼がフランス語の環境に入ったのが、5歳～8

歳のときだというのは、だからきわめて意味深いことなのだ。それより幼ければ、フランス語以外の記憶は残らなかっただろう。もう数年あとならば、それ以前の言語がもっと定着していて、フランス語はどうしても第二言語の位置に置かれることになっただろう。だがアポリネールにとって、フランス語は、自分の身にもっとも“自然で異質な”言語、という逆説として存在することになったのである。

おそらく彼がふだんはもう意識することもなくなったであろうこのフランス語への違和感は、われわれの推察ではけっして忘れ去られることはなかったと思われる。フランス語が「驚きの的」であるという経験を、詩人アポリネールは、生涯、生き続けたにちがいない。それはたとえば、行頭に恋人の名の綴り字を織り込んだアクロスティックという技巧を用いた言葉あそび風の詩や、あのかずかずの有名なカリグラムにも伺われはしないだろうか。言葉（とりわけ文字であるが）をいかにも「操作」しているという印象を与えるあれらの技巧的な創作活動に、彼の言語に対する根本的な距離が感じられないだろうか。

3．言語への違和感ゆえの詩人

ここで詩集『アルコール』(1913年）が出版された際に、ジョルジュ・デュアメルが文学界の権威である雑誌『メルキュール・ド・フランス』に載せた酷評を思い出したい。彼はあらゆる否定的な言辞を用いてこの斬新な詩集とその詩人をこきおろしているが、その評言にはこうあった。「類推（アナロジー）によって導かれるかわりに、彼は好んで語（モ）に誘われたがっている」、あるいは「粗野で耳を聾するようなヴァラエティ」。デュアメルはこうした表現でこの詩集がいかに無価値ながらくたの寄せ集めにすぎないか、その作者がいかに鼻持ちならない不快な似非詩人であるかを主張しようとしている。しかしデュアメルのこの価値判断を別にすれば、彼の評言は、新たに登場したこの詩人の特徴を、みごとに言い当てていて、われわれとしては感心せざるをえない。つまりアポリネールは、自然な類推をたどって心地よいハーモニーを生み出そうとしているのではなく、フランス語の語（モ）それぞれがもつ互いを邪魔しあうほどの衝撃的な喚起力に導かれようとしているのだし、彼の詩の魅力は、そうした力ある言語が内包する齟齬の感覚そのものにあるのだ。デュアメルが読みとっていたとおり、アポリネールの詩は、言語への違和感によって成り立っているのだ。

この違和感こそ彼のあらゆる創作活動を支えるものだと思われる。芸術家は人間にとって不自然なものを相手に、それと格闘する存在であるはずだ。この

格闘を通じて、不自然なるもののもつ狂暴な力を明らかにしてみせること、それが芸術家の使命である。このようにアポリネールは考えていたにちがいない。たとえば彼はある美術評論で、ありのままの自然というものを否定して、こう表明している。「造型の本質 —— 純粋性、統一性、真実性という見地からすれば、なまの自然など一顧の価値もないものだ」[20]。まさに『アルコール』において、大胆にも句読点を廃止し、自然な流れを断ち切ってぎくしゃくした感じを引き起こすような「同時主義」の詩を唱えて、「言語によるキュビスム」を実現しようとしたのも、言語のこの違和感にこそ詩の源泉をみたからではないだろうか。彼は1917年の詩集『カリグラム』のあの詩篇「勝利」のなかで、まさに「言葉とは唐突なもの、わななく神なのだ」と言明している。だからこそ彼は詩人が従来の心地よい表現に身を委ねることなく、あえて新しい言語を大胆に創造してゆくことを要求するのだ。「勝利」の有名な一節はこうであった。

おお　たくさんの口　人間は新言語を探求するためにある
どんな言語の文法家も口のはさめぬような新言語を
そしてあの古い言語はあのようにも死に瀕していて
依然としてそうした言語を詩に仕えさせているのは
まったく習慣的なことであり　大胆さを欠いている[21]

日常性のなかで、あるいは詩の伝統のなかで摩耗した言語を「驚きの的」として蘇らせることにこそ、彼が詩人の使命を見ていたことは、「新言語」の探求を謳うこの高らかな調子にも明らかである。彼が幼い日の不自由な言語体験を忘れなかったのは偶然ではないだろう。言語に一切のものを賭けるのが詩人の天職であるなら、いわば生を賭して言語と格闘し言語を獲得した彼は、それゆえにこそまさに詩人たるべき人間であったことになる。彼はまた書簡においても「あらゆる詩に、つまりあらゆる創造に欠くべからざる内的な束縛というものがあり、またその詩的方法の役割に、“語の異常な魔力”をもってくるのが正しいのです。」[22] と語っている。言語の不自由さと驚きを生きることが詩人の営みであることを、彼は自分の使命として、明確に認識していたのである。

第4章　起源の不在 —— アポリネールの「クレオール」性

1．アポリネールにおける「起源」の欠如

彼の異言語体験および広くいえば世界への違和感が彼を詩人として成立させているさまを前章にみた。本論考の最後に、この章では、アポリネールの不安定な存在のしかたのもつ現代的な意義を、「クレオール」の問題と接合させることによって考えてみたい。

彼は幼いときにイタリアからフランスへと渡ってきた移民であり異邦人である。しかし彼はほとんど完全にフランス社会に同化した。彼が就学前にフランスにやってきたこと、両親の家系との接触が完全に断ち切られていたこと、唯一の家族である母親が享楽的に現在を生きる女性であったことなどが、彼の同化を容易にした原因として挙げられる。彼が、自分がフランス社会のなかで異邦人であることを初めて強烈に認識したのは、絵画盗難の容疑で刑務所に収監された1911年のあのジョコンダ事件の折であった。彼は自分が外国籍であるためにこの事件によって国外追放になるのではないかと極度に恐れたのだ。この恐怖は釈放後も彼の強迫観念になった。彼は友人宛ての書簡のなかで、この件を蒸し返す者が出てくるのではないかという不安がぬぐえず、「フランスから追われたとしたら、私はどうなるだろうか？」という疑念で心の平静を失ってしまっている、と書いている[23]。第一次大戦の折の兵役志願や国籍取得は、むろんこの強迫観念と無関係ではない。

このエピソードにわれわれは、いわば“外国人”である彼が“真のフランス人”となり、安定した位置づけを得たいと願ったという、陳腐な物語をみてとりたいのではない。「フランスから追われたとしたら、私はどうなるだろうか？」というこの問いは、彼が実はフランスにおいて「外国人」ですらなかったという事実を照らし出しているという点を強調したいのだ。彼は「フランスから追われたら」文字どおり行くところがない人間なのだ。彼は故郷を追われた亡命者ではない。エドワード・サイードは亡命について次のように書いている。

> 亡命という状況の根底には、自分自身のネイティヴな土地がたしかに存在し、それにたいして愛と結束の感情をいだいているという事実がある。[24]

亡命者には「甘く懐かしい故郷」があり、彼らはそれを奪還できないという思いで日々を送っているのだ。

アポリネールがこうした「亡命者」の仲間でないことは明らかだ。彼がフランスへ移り住んできた理由が、社会的・政治的迫害によるものではなかったということが問題なのではない。彼には、フランスに来る以前の「懐かしい故郷」などはない。故郷というものがもともと存在しないという点が、彼を「亡命者」と根本的に分かっている。イタリアにいるときですら母親の放浪癖のせいもあって居所が定まらなかったし、4歳以下の記憶は普通は存在しないものだ。そのうえ彼は自分の父親が何人であるかも定かには知らなかった。だから彼がローマないしイタリアを自分の「ネイティヴな土地」と思っていたとはまったく考えられない。彼の国籍となっているポーランドはどうであろうか。これも問題外である。行ったこともないポーランドを、彼が自分の「故郷」と考えられるはずもない。だから彼は、自分が途中からフランスにやってきた「よそ者」であることは明確に知っていても、ではフランス人ではなく何人かと問われても答えようがないのである。そうした意味では彼は「異邦人」や「外国人」ですらない。彼はよそに起源をもつ「異邦人」ではない。彼にはどこにも起源というものがないのだ。

こうした「起源の不在」というアポリネールの存在のありかたは、近年話題になっている「クレオール」の問題とかなり多くの点で通底するのではないだろうか。この「クレオール」の観点を導入するとき、手垢のついたアポリネールの伝記も、新しい興味を放っていたことが明確になるのではないか。

2．クレオール

クレオールとは諸民族の混淆によって生まれた、民族や言語や文化の複合状態を言う[25]。とりわけカリブ海のフランス語圏となっている、マルティニック島、ガドルップ島、ハイチなどの地域にみられるこうした文化複合が「クレオール」の名で呼ばれる。

この地域では、1625年にフランス人の入植が始まる。たちまちカリブ人は征服され、同時に「ニグロ」と呼ばれる黒人奴隷がアフリカから移入される。まもなく現地人であったカリブ人は消滅させられてしまう。(17世紀後半には奴隷制が制定され、それがつい最近の1950年の廃止までほぼ300年間存続してきたことを、われわれは確認しておかねばならない)。

カリブ人の消滅によって興味深い状況が出現する。先祖代々そこに住んでいた生っ粋の「現地人」が誰もいない、よそ者だけの社会が生まれたのだ。すべての住民が、よそから来た者の子孫である。しかもアフリカばかりでなく、さ

まざまな土地から労働力として人間が連れてこられた。こうしてカリブ海フランス語圏では、フランス人入植者の子孫、アフリカ系、インド系、アジア系、レバノン系の人々が接合して生きる、文化・民族のモザイク状態が発生する。こうした民族のそれぞれは明確に異なった社会的な階層を形成していたし、民族間の婚姻による血縁の混交はタブーとされてきたから、ある程度の内部性が保たれてきた。したがって諸文化・諸民族が完全に融合し合うことはなかった。たとえばフランス人入植者（の子孫）とアフリカ人（を祖先とする）奴隷は、それぞれの身分と職域を截然と分かったうえでひとつの地所のなかで隣り合って住み、生活と農業生産をおこなう共同空間「アビタション」（プランテーション）を形成してきた。そうした実際の生活における隣接・接触の結果として、言語や文化が必然的にモザイク的な混淆をみせることになったのだ。

こうして現在、クレオール語と呼ばれる、カリブ海地域の混成言語ができあがる。これは文法構造や多くの語彙をフランス語に依拠しながら、さまざまな民族起源の言語要素を織り込んで成立している言語である。17世紀以前のカリブ語は、皆無とは言わないまでもごくわずかな語彙にその片鱗が残されているだけであって、カリブ海のクレオール語はよその土地の言語ばかりを掛け合わせた混成言語なのだ。

入植してきた、あるいは強制的に連れてこられた第一世代の人々には、自分の根拠たる故国、自分のもとの国の言語、純粋なる自民族の文化があった。しかしこのカリブ海で諸文化接合のなかに生まれた第二世代以降は、いわば「生まれながらの流謫」の状態にある。黒人奴隷の子孫は現在、祖先からアフリカの文化を受け継いではいても、自分をアフリカ人だとは感じていないだろうし、フランス国籍を有し公用語たるフランス語を身につけてはいても自分をフランス人だとみなすことには抵抗があるだろう。同様のためらいは、ほかの人種系統の者たちにも、また白人入植者の子孫にもあるだろう（彼らが「本土の」フランス人と自分たちとを同一視することは困難だろう）。かかえる問題のあり方は異なってはいるが、クレオールの人々はみな、自分の民族的・文化的な「所属」が不明なのだ。こうして「自分が何者なのかにも気づかない民」[26]が誕生する。クレオールの人々には起源というものがなく、同一性というものが成立しない。根本的な複合性のなかに生きている彼らは、「普遍」や「本質」に立脚する思考の圏外に身を置いているのだ[27]。そうしたあいまいさは長いあいだ、彼らを世界の余白者の位置に追いやってきた。

クレオール化とは、こうした「アイデンティティの脱臼」状態を自分の生存

のモードとして生きはじめることを言う。このときこの「脱臼」状態は、それ自身の働きを発揮し始める。堅固な自己同一性、純粋なる自民族の文化、大文字の祖国、そうしたあらゆる「起源」というものの方が実は幻想にすぎないことを、この「脱臼」者たちは現在、世界に向かって主張し始めた。

3．アポリネールの「クレオール性」

アポリネールの存在のありかたに、われわれはクレオールと共通したものをみることができはしないだろうか。彼は決して、“祖国”の文化を捨ててフランス人になりたがったのではない。彼はもともと何人でもなかったのだし、国籍を取得したところで、“生っ粋の”フランス人になったわけではない。彼には自分の存在が本質的な混淆によって成り立ち、浮遊状態を基盤としていることが、直感されていたはずだ。しかも彼は根っからオプティミスティックな人間であり、あの国外追放の不安を除けば、彼は、名前にしろ容姿にしろ、正体不明な自分の異邦性をどちらかといえば楽しんでいたように思われる。そして詩人としては、フランス語を使いながらフランス語を新しく作り直すような破壊的な創作をこそ積極的な使命としていたのである。

この点に関して、クレオールの偉大なる詩人エメ・セゼールの逸話をどうしても引き合いに出しておきたくなる[28]。

マルティニック島の今世紀の詩人エメ・セゼール（黒人である）は、完全なクレオール語ではなくフランス語で詩を書きながらも、そこにクレオール的な要素を盛り込むことによって、マルティニック的であると同時に黒人的でなおかつ普遍的でもあるような表現を実現したとされる。彼はフランス語を用いることによって、フランス語の内側からの革命を引き起こしたとも賞される詩人である。1941年、亡命地ニュー・ヨークに向かっていたアンドレ・ブルトンはマルティニック島に寄港するが、ここで官憲に拘束され足止めを食らってしまう。次の船を待つあいだの日々に、買い物に寄ったある雑貨店で、偶然手に取った現地の雑誌のなかにセゼールの詩を発見した彼は驚愕を覚える。「自分の目が信じられなかった。だがそこに言われていることは、まさしく言わねばならぬこと、言うべき最良のことを言うだけでなく、言いうるもっとも高邁なことであった」と彼はこのときのことを回想している。

アポリネールを崇拝していたブルトンのこの激賞は、われわれにとっても興味深い。なぜならこの衝撃は、フランス語の内部にいながら外部にいるような詩人によって初めてもたらされうるものだからだ。クレオールの問題とは「言

語の問題なのか、それとももっと強く言語に対する要求なのか」[29]と、セゼールを論じながら『クレオールとは何か』の著者は述べている。まさに言語に違和感をもち、言語に対する強い要求をもつ者だけが抉出することができる言語の力というものがあるのだ。

クレオールの詩人の内発的なエネルギーと、彼が文学の世界にもたらす衝撃の由来とを、さきの著者は次のように語っている。「フランス語の内側からの革命」を考えていたセゼールは「白人の言語の内部でニグロの言葉を語ろうとする」。これにブルトンが打たれたのは、「シュールレアリストとは自分がなにかを知らないニグロ」だったからだ、と[30]。ニグロとは白人社会に生きる、起源をもたない、あるいは複数の起源をもつ、引き裂かれた存在者のことにほかならない。

フランス語の、あるいはフランス社会の内側に存在する他者として生き続けたアポリネールもまた、まさにこの、「自分がなにかを知らないニグロ」だったと言えないだろうか。

彼はそれをみずから標傍することはなかったが、一つの起源をもたない複合的な存在者として生き、さらにそこに詩人としての自分の原動力を見出していたのだと思われる。詩集『アルコール』におさめられた「行列」という詩をみてみよう。ここではついに彼のアイデンティティが自問されている。

ある日
ある日　ぼくはわれとわが身を待っていた
ぼくは自分に言った　ギヨーム　そろそろきみも出て来いよ
ぼくとは誰であるかを知るために
他人を知っているこのぼくが
ぼくは五感によって　また他の何かによって人を知る

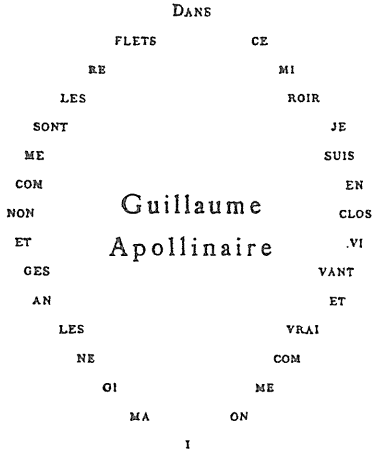
その答えはどうであろうか。

（中略）
それから陸上に千万の白い蛮族がやってきた
その一人一人は手に一輪のバラを持っていた
そして彼らが道すがら発明したことばを
ぼくは彼らの口移しにおぼえ　ぼくはいまもそのことばを話してる

行列は過ぎて行き　ぼくはそのなかに自分の身体を探した
やって来る人々はいずれもぼく自身ではなかったが
ぼく自身の破片（かけら）を彼らは一つ一つもたらした
人々は一つの塔を建てるように少しずつぼくを建造した
諸民族が集まって　このぼくという身が現われた
ぼくをつくったのは　あらゆる人間の身体と事物だ[31]

ここで驚くほど明確に彼は、無数の起源をもつ複合物として自分の身体を感じ、ひとびとから借り受けた言語を話す者として自分を位置づけている。そして引用箇所に続くこの詩の最終部分でもはっきりと表明されているように、彼は「無色」で「無形」の明日を前にして、不安と希望とをいだきながら、「努力」によって何事かを打ち立てようと意志している。彼を偉大たらしめるものがあるとすれば、それは彼のアイデンティティではなく、あくまでも前進しようとする挑戦的な力に相違ない。

最後にアポリネールのカリグラムをひとつ掲げておきたい[32]。鏡をかたどった周辺部には「この鏡の中に、鏡に映った像のようではなく　思い描かれる天使のように　ぼくは生きたまま真実の姿で閉じ込められている」とある。“像＝反映（reflets）ではない”という表現は、つまりもとの「実体」なるものがない、ということを言おうとしているのではないだろうか。ところで彼は一体どのように、まさに彼どおりの生きたありかたで閉じ込められている（enclos vivant



et vrai）というのだろうか。鏡に映っているのは彼の名である。本論稿でのわれわれの解釈では、彼にとって名は仮そめのもの、本質を保証しない便宜的なものであった。つまり彼は、何者でもないということのみをもってして生きている存在だったのではないだろうか。

注

1）この論文は、1998年6月23日におこなった、平成10年度筑波大学比較文化学類公開講座「フランス詩と音楽VII　アポリネールと音楽家たち」第3回での講演、「＜フランス詩人＞アポリネール —— 言語と＜自己＞への距離」の内容を拡充したものである。

2）1915年7月30日付マドレーヌ・パジェス宛の手紙での回想。Guillaume Apollinaire, *Tendre comme le souvenir*, Gallimard, 1952, p. 70.

3）ギヨーム・アポリネール『虐殺された詩人』窪田般彌訳、『アポリネール全集』（以下『全集』と略）、II、青土社、p. 409。

4）同上、p. 408。

5）同上、p. 410-411。

6）同上、p. 411。

7）cf. 飯島耕一『アポリネール』、美術出版社、1966年、p. 183。

8）1916年5月7日のものと推測されるマドレーヌ宛の手紙。Apollinaire, *Tendre comme le souvenir*, p. 349.

9）1916年8月26日付マドレーヌ宛の手紙。これがマドレーヌに送った最後から2番目の手紙にあたる。この手紙でアポリネールは、あらゆる手紙が自分を怖がらせる、兄にも母へも手紙を書くことができない、誰にも会いたくない、と自閉的な対人恐怖を訴えているが、マドレーヌに対する拒否はとりわけ厳しいように思われる。Apollinaire, *Tendre comme le souvenir*, p. 350.

10) Marcel Adéma, *Guillaume Apollinaire, le mal aimé*, Plon, 1952, p. 245.

11) ランダに送った詩「結婚」より。この詩はのちに詩集『イリヤ』に収められた。«Épousailles» , in *Il y a, Œuvres poétiques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p. 336.

12) 1915年10月8日付の書簡中の詩「嘆き」(Plainte)のなかで。Apollinaire, *Tendre comme le souvenir*, p. 189.

13) バフチンの他者論については拙論文「ディスクールの思想家バフチンによる他者論 —— フランス（ポスト）構造主義の文脈との関連」、阿部軍治編『バフチンを読む』、日本放送出版協会、NHKブックス、1997年所収、を参照されたい。

14) アポリネールの出生と幼少時代については、マルセル・アデマの伝記に多くを負っている。

15) 「二世」という問題は、本論考第4章のクレオール性の問題と考え合わせることができる。とりわけ、在日韓国人二世が置かれている、一世の世代とは異なっ

た起源剝奪の問題が興味深い。これについては、竹田青嗣『<在日>という根拠』(初版1983)、ちくま学芸文庫(増補版)、筑摩書房、1995年が多くの貴重な考察を展開している。

なおこの増補版に収録されている「三つの名前について」では、竹田自身の名前をめぐる問題が論じられている。彼は通常用いていなかった「民族名」で、韓国人同邦から自分が呼ばれるようになったときの経験を次のように語っている。「わたしは、自分が何ものであるかは自分では決められないのだ、ということをそのとき了解したように思う。〔中略〕そういうわけで、私の場合は、姜という「本名」を積極的に“名乗った”というのではなく、ただそれを甘受したにすぎない」(p. 275)。二世の立場すなわち複数の起源を有する者にとってのこうした受動的な名のありかたについて、本論文第3章のアポリネールの「名前」に関する考察とあわせてお考えいただきたい。

さらに付け加えておくと、上に引用した竹田の言にも表わされているように、起源を剝奪された者たちにとっては、現在の実生活における人間関係がもたらす自己認識がより大きな重要性をもってくるように思われる。それにもかかわらず、アポリネールにはその「関係」が欠如していたということは、一層興味深い問題として立ちあらわれてくる。アポリネールがマドレーヌとの不和のなかで経験したものが「危機」と呼びうるものだとわれわれが考えるのはそのためでもある。

16) アポリネールが軍隊生活を「天職」と呼ぶほど好み、なんじんでいたことは興味深い。「私は元気だ。兵隊という職業は、私の真の職業だと思える。私はたいへん好きだ。恋人は私がいつもオペラ座に居るようだと言うが、ほんとうだ。」(1915年1月4日付セルジュ・フェラ宛て書簡)

17) スタンダールの偽名癖については、ジャン・スタロビンスキーの論文「偽名家スタンダール」、『生きた眼』、理想社、1971年所収、およびジェラール・ジュネットの論文「“スタンダール”」、『フィギュールII』、書肆風の薔薇、1989年所収、が参考になる。

18) Adéma, *Guillaume Apollinaire, le mal aimé*, p. 13.

19) Cf. 飯島『アポリネール』、p. 29 (ルイーズ・フォール・ファヴィエ夫人宛とされている)。

20) 「造型の三つの本質」(ル・アーヴル市庁舎での「現代美術サークル」の第3回展覧会カタログ、1908年7月)、in *Chronique d'art, Œuvres complètes de Guillaume Apollinaire*, Balland et Lecat, vol. 4, 1966, p. 92.

21) アポリネール「勝利」飯島耕一訳、詩集『カリグラム』、『全集』I、pp. 468-469。

22) 1917年5月、ポール・デルメ宛書簡、“シュール・レアリスム”演劇『ティレジアの乳房』の初演に先立って、in *Chronique d'art, Œuvres complètes de Guillaume Apollinaire*, vol. 4, p. 886.

23) 1911年12月9日付トゥサン・リュカ宛。cf. 飯島、p. 109。

24) Edward Said, «The Mind of Winter : Reflections on Life in Exile», Harper, 1984, p. 55 (今福龍太『クレオール主義』、青土社、1991年、pp. 10-11に引用)。

25) クレオールに関する基本的な知識は、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアン共著『クレオールとは何か』（平凡社、1995年）の序文の手際良い概説が与えてくれる。なお本論文のクレオールおよび在日韓国人についての考察は、第18回日本記号学会大会での大澤真幸氏の講演（1998年5月17日、文教大学湘南キャンパス）に多くの示唆を負っている。
26) シャモワゾー、コンフィアン『クレオールとは何か』、p. 164。
27) Cf. 同上、西谷修、解説、p. 300。
　なお1988年の講演を収めた、クレオールのマニフェストである『クレオール礼賛』（ジャン・ベルナベ、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアン共著、平凡社、1997年）は、「我々はあらゆる試行錯誤を恐れず、自らを複雑なものとして容認する必要を痛感して、クレオール性に向かう。なぜなら、我々のアイデンティティーの根幹は複雑さだからである」（p. 43）ということを公然と断言し、さらにクレオール性の探究を「人間の条件」の探究であると位置づけている（p. 62）。クレオール性とは「誤った普遍性、単一言語主義（モノランギュイスム）、純粋さを打破するもの」（p. 43）であり、「我々こそ諸文化の接触を予告し、出現しつつある近未来世界を先取りしていたのだ」（p. 40）。この書物で著者たちが、クレオール性の探究と確立は文学を通じてのみおこないうるという主張を展開するにあたって、アポリネールを引き合いに出している（p. 64）のは、われわれとしてはまことに興味深い。
28) エメ・セゼールについては、『クレオールとは何か』p. 179sq.を参照した。
29) 同上、p. 222.
30) 同上、p. 182.
31) アポリネール「行列」飯島耕一訳、詩集『アルコール』、『全集』I、pp. 124- 128。以下に、本文中で引用した部分につづく、この詩の末部を挙げておく。

　過ぎた時よ　故人となった人々よ　ぼくを形づくった神々よ
　あなた方が通り過ぎて行ったように　ぼくもただ過客として生きる
　うつろな未来から眼をめぐらすと
　ぼく自身のうちに過去が大きなものとなるのがわかる

　まだ存在しないもののほかは　何ものも滅びていない
　光り輝く過去のすぐ側で　明日は無色だ
　明日はまた無形だ
　努力と結果の全体をさし出す完璧さのまえでは

32) 以下の一部。«Cœur couronne et miroir» , in *Calligrammes, Œuvres poétiques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1965, p. 197.

参照文献

・アポリネールの著作

Apollinaire, Guillaume, *Œuvres complètes de Guillaume Apollinaire*, 4vol, Édition établie sous la direction de Michel Décaudin, André Balland et Jacques Lecat, 1965-1966.

—— *Œuvres complètes de Guillaume Apollinaire, fac-similé*, 4vol, André Balland et Jacques Lecat, 1965-1966.

—— *Œuvres poétiques*, préface par André Billy, texte établi et annoté par Marcel Adéma et Michel Décaudin (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1965.

—— *Lettres à sa marraine*, 1915-1918, introduction et notes de Marcel Adéma, Gallimard, 1951.

—— *Tendre comme le souvenir*, Gallimard, 1952.

—— *Lettres à Lou*, préface et notes de Michel Décaudin, Gallimard, 1969.

—— 『アポリネール全集』 I ～IV、青土社、1979年。

・その他の文献

Adéma, Marcel, *Guillaume Apollinaire, le mal aimé*, Plon, 1952.

青柳悦子「ディスクールの思想家バフチンによる他者論 —— フランス（ポスト）構造主義の文脈との関連」、阿部軍治編『バフチンを読む』、日本放送出版協会、NHKブックス、1997年、pp. 197-218。

飯島耕一『アポリネール』、美術出版社、1966年。

今福龍太『クレオール主義』、青土社、1991年。

シャモワゾー（パトリック）・コンフィアン（ラファエル）『クレオールとは何か』、西谷修訳、平凡社、1995年。

ジュネット（ジェラール）「“スタンダール”」神郡悦子訳、『フィギュールII』花輪光監訳、書肆風の薔薇、1989年、pp. 173-220。

スタロビンスキー（ジャン）「偽名家スタンダール」、『生きた眼』大浜甫訳、理想社、1971年。

竹田青嗣『＜在日＞という根拠』（初版1983）、ちくま学芸文庫（増補版）、筑摩書房、1995年。

平林和幸「アポリネールとマリー・ローランサンの愛のゆくえ —— なぜ詩人は愛の詩を書くのか」、武蔵大学公開講座委員会編『武蔵大学公開講座 文学の中の人間像』、お茶の水書房、1995年、pp. 57-100。

ベルナベ（ジャン）・シャモワゾー（パトリック）・コンフィアン（ラファエル）『クレオール礼賛』恒川邦夫訳、平凡社、1997年。

堀田郷弘『アポリネールの恋の詩と真実』、高文堂出版社、1988年。